

言葉の響き ～ 希望が灯る ～

2025 年 10 月 13 日(第 2 月曜日)は、『スポーツの日の祝日』で、筆者の故郷で『第 37 回出雲全日本大学選抜駅伝 競走出雲駅伝』が開催された。自宅でのテレビ番組で『出雲大社正面鳥居前からのスタートの風景』(画像)を観て、大変懐かしかった。

筆者の生まれ育った故郷【当時の住所名：島根県簸川郡大社町鵜峠(うど)、現在は、島根県出雲市大社町鵜峠で、人口 34 名、60%の空き家であり、出雲大社から、8 キロほど、峠を越えて美しい日本海に面した小さな村である。】(画像)は 無医村で幼年期、熱を出しては今は亡き母(96 歳で逝去)に背負われて、隣の村(鷺浦;さぎうら)の診療所に行った体験が、脳裏に焼き付いている。

母校の鵜鷺小学校(鵜峠と鷺浦の中間に位置する)の卒業式で、来賓が言った言葉『ボーイズ・ビー・アンビシャス』(boys be ambitious)は、札幌農学校を率いたウィリアム・クラーク(1826-1886)が、その地を去るに臨んで、馬上から学生に向かって叫んだと伝えられている言葉である。クラーク精神が内村鑑三(1861-1930)、新渡戸稲造(1862-1933)という後に、筆者の尊敬する 2 人を生んだことも知らぬまま、ただ、鵜鷺小学校の卒業式で、来賓が言った言葉の響きに胸が染み入り、ぽっと希望が灯るような思いであったものである。

そして、南原繁(1889-1974)、矢内原忠雄(1893-1961)に繋がった。筆者は、2004 年にスタートした南原繁研究会【初代代表、鴨下重彦先生(1934 年-2011 年、東京大学名誉教授、国立国際医療センター名誉総長)、第 2 代代表、加藤節先生(成蹊大学名誉教授)】の 3 代目の代表を 2019 年『南原繁生誕 130 周年』を祝し、仰せつかっている。

英文で書かれた内村鑑三『代表的日本人』(1895 年)と新渡戸稲造『武士道』(1899 年)は、若き日からの座右の書である。筆者は、2007 年から、内村鑑三『代表的日本人』と新渡戸稲造『武士道』の読書会を毎月行っている。既に 5 巡目である。『人生邂逅＝非連続性の連続性』を実感する日々である。

